

本を選ぶ

NO.401 2018年(平成30年)10月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん>アカンサス 続
- 教科書の図書館『東書文庫』を訪ねて
- 図書館をテーマにつなごう！
- ありがとうのキモチ
- 鳥の目 70

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

アカンサス 続

引っ越しの荷物を解いて、出てくる古い本の山に唾然とする。随分手放したつもりが、目こぼれなのか残った本たちがちゃっかり顔を出す。やむなく埃を払いながら新しい棚に戻して、そんな一冊一冊とおしゃべりをしたりする。モノとしての本には、製造工程毎にいろいろな特徴が見える。装丁はもちろん、紙の種類、印刷、カバー、スピンも時代毎に変遷があって楽しめる。

知人が譲ってくれた大佛次郎の『パリ燃ゆ』(上下巻)はそれぞれ函入りだが、菊判変形、上製ではなく並製カバー装、折り返しは留折りになっている。見返しにはパリ市の地図が印刷され、そしてその上からパラフィン掛け。本文は書籍用紙70kg。奥付に昭和39年12月1日第7刷と見えるが、さらに版を重ねたはずだ。印刷は活版だが紙型を起こして鉛版で印刷されているように思われる。版元が朝日新聞社とあって発行部数の桁が違うのだろう。本文組みの活字は7ポイント、1行29字24行取りの2段組み。ぎっしり詰まっいて少し読みづらい。

アララギ派の歌人、近藤芳美の随筆集は四六判上製、布装、函入り、表題と背文字とも箔押し、そしてカバーではなくパラフィン紙掛け。見返しは色上

質紙特厚。奥付を見ると昭和40年12月20日発行。当時の典型的な単行書のつくりだ。本文用紙はやはり書籍用紙70kg程度か。印刷は押しの利いた原印刷。本文の活字は9ポ、1行30字15行取りの一般的な活字組みになっている。著者の謹呈短冊がはさまれたまを古本屋で入手したはずだ。

近藤芳美のこの随筆集『アカンサスの庭』の函は、さすがに当時よく見かけたいわゆる馬糞紙と呼ばれるボール紙ではなく、白ボール紙。全体にモダンな感じがする。一方『パリ燃ゆ』の函は厚手の段ボール製で横目使い。書籍本体に比してやや大ぶりなのは、製本が堅い上製ではなく、柔らかいカバー装であることを考慮していると思われる。

かつて岩波文庫ももっていたパラフィン紙は、最近の出版物ではまず見掛けなくなった。上製であれ並製であれ、装丁としてジャケット(カバー)が一般的になって以来、パラフィン紙は出版界から消えてしまった。かつては紫外線対策として手許でも1冊ずつパラフィン掛けをせっせとやっていたのだが、次第に難しくなった。代用としてグラシン紙が普及しているけれど、風合いが全く違う。需要が大幅に減れば、パラフィン紙は製造もされない。だから入手は困難となる。首都圏では製造は1社、しかも小売りには応じない。関西では小さな会社が昔ながらに製造を続けている。交渉次第で小売りもカットもしてくれるが、いささか高価だった。

庭の端っこのシラカシの根本から新たなアカンサス・モリスが芽を出した。そのつやつやした緑の葉っぱが季節はずれのようにもある。(埜村 太郎)

教科書の図書館『東書文庫』を訪ねて

神原 和子

中秋の名月ももうすぐという9月下旬、教科書の図書館・東書文庫を訪れた。文庫はJR王子駅から徒歩10分、都電荒川線栄町駅から徒歩3分。大きな銀杏の木など緑豊かな敷地の中にアールデコ様式を基調とした意匠が用いられた東書文庫が静かに迎えてくれた。

1 東書文庫とは

東書文庫は、日本で最初にできた教科書図書館で、正式名称は「東京書籍株式会社附設教科書図書館 東書文庫」という。昭和11年(1936)6月の開館以来、教科書の収集・保存を行ってきた。

その歩みを年譜と共に追ってみると、東書文庫は東京書籍創立25周年記念事業(会社は明治42年(1909)設立)によるもので、三代目社長の石川正作氏の「今のうちに日本の教科書を蒐集し保存しないと何れ散逸してしまう」という考えで、この専門図書館の設立を決定した。6月に竣工、同月25日開館、鉄筋コンクリート造、延床面積734㎡。東京書籍翻刻発行の教科書、寄贈図書、収集図書など5,500冊の公開を始める。後に各方面からの寄贈などにより所蔵資料は着々と充実していった。特に初代館長細江省吾氏の資料収集への奮闘ぶりは語り継がれているようだ。

昭和13年(1938)に文部省から明治時代からの検定教科書等47,000点寄贈され、昭和15年(1940)には所蔵図書は72,000点に達していた。

昭和20年(1945)4月に王子周辺は空襲を受けるが、社員の奮闘で本社屋、工場、文庫とも焼失を免れ、現在も文庫はその当時の姿を残している。(本社は近くに新築、工場は埼玉に移転している)

平成11年(1999)、東京都「北区指定有形文化財(建造物)」、平成19年(2007)には経済産業省による「近代化産業遺産」、平成21年(2009)には近代教科書関係資料として所蔵資料のうち76,420点が国の「重要文化財」の指定を受けている。

2 展示と閲覧

東書文庫は、一般に向けて展示室の見学と資料の閲覧を行っている。文庫は現在160,600点の資料を所蔵している。内訳は、●明治以前教科用书2,200 ●明治初年～昭和20年小学校教科用书38,800 ●旧制中学校・旧制女学校・実業学校・師範学校教科書35,300 ●旧外地教科書1,300 ●教育一般書10,700 ●掛図1,300 ●版木200 ●原画200 ●戦後文部省著作本1,400 ●戦後検定教科書 小学校・中学校・高等学校その他65,700 ●学習指導要領1,200 ●謙堂文庫旧蔵資料3,300、となっている。

[展示]

上記の資料の一部を展示室で見学することができる。主に教科書を中心とした展示で、年に一回展示替えをしている(概ね4月)。見学の際は館長が案内・説明をしてくれる。

私が見せていただいたのは、始めにパネルを3枚、江戸期の武士と庶民の教育の絵図と、明治期の近代教育が始まった頃の絵図。その説明を聞くだけで、日本の教育の歴史がよくわかる。その後、展示ケースに展示された個々の教科用図書を時代を追って見ていく。

1380年の写本「新札」に始まり、江戸期の「往来物」(=教科書)が並ぶ。武士階級が学んだ「漢籍」も展示されている。庶民には「御家名頭并国尽」(使用頻度の高い名字や国の頭文字を覚える教科書)、女子には「女四書芸文図会」その他職業別教科書「諸職往来」等々。江戸期には寺子屋がたくさんあり、教育が充実していて識字率が高く、作家や瓦版屋等の職業が生まれたとのお話を伺い、教科用の資料を見てますます教育の充実度を実感した。

時代は下って、明治期の教科書は外国の知識を取り入れようと製作された翻訳教科書も展示されている。明治4年に廃藩置県、文部省が置かれた。明治19年教科書の検定制が始まる。展示室では検定を受け、訂正箇所を和紙の付箋で示した教科書



(文部省から寄贈)を見ることができて興味深い。日清戦争後に作られた第1期の国定教科書、第2期は日露戦争後で、東京書籍は第2期国定教科書から翻刻発行している。教科書は時代を

映し、日清戦争や日露戦争の挿絵が国威発揚のもとに使われていることがわかった。

第3期は大正デモクラシー時代、第4期は昭和8年、「サイタサイタ サクラガサイタ」で国語の教科書が始まる。第5期は昭和16年、大東亜共栄圏が謳われ、「サイタ・・」から「アカイアカイアサヒアサヒ」となる。

終戦後の墨塗り教科書も展示され、墨塗り前の教科書も併せて見られる。修身、地理、日本の歴史は墨塗りせず、全て回収・廃棄されたのでそのままのものが残ったということだ。

終戦直後、物資も揃わない中、作られた折り畳み教科書も展示されている。壁際の大きな展示ケースには掛図も展示され、色鮮やかな絵を使っの授業が想像できる。

説明していただいてわかったことがもう一つ。戦前の教科書は職人が木口木版とって、木口の手彫りで精密に写真のように彫り、教科書の挿絵となったことに驚かされた。教科書の歴史を学べると同時に世代によっては懐かしい教科書に出合うこともできる貴重な場所である。

[閲覧]

玄関に入って右手奥に閲覧室はある。机は2つ、4人まで閲覧できる。各机にPCがあり、蔵書検索ができるようになっている。資料全部が閲覧できるわけではないので、蔵書を検索してから利用となる。必要な図書は、1回に12冊まで閲覧表に書き、同室にいる職員に渡すと、資料を用意してくれる。閲覧表は何回でも提出できる。利用の年齢制限はない。職員がいつも部屋にいてくれるので、資料の依頼や質問などに答えてくれることもありありがたい。ただし、昼12時から1時までには閲覧はできない。コピーは資料が傷むので不可である。

この閲覧室、教科書の研究者や教育学を専攻している学生が主な利用者であるが、ご年配の方が昔使用していた教科書を懐かしがって閲覧されたり、夏休みの宿題に親子で来館されることもあるという。

東書文庫の資料は今後も増加の一途をたどるが、保存について聞いてみると「温・湿度など保存の環境を整える必要があり、現在もいろいろなスペースを縮小して、保存スペースを作っている」とのこと。

3 東書文庫を利用するには—

さて、上記のような展示と閲覧を利用するためにはまず電話で予約をすること。電話番号は03-3927-3680。予約をして、来館したら玄関を入り左手の事務室で、手続きを行う。

< 展示 >

- ・開館日 月・火・水・木・金 (除: 祝祭日)
- ・開館時間 午前9時30分～午後4時30分
見学受付表に必要事項を記入。身分証明書を提示。
* 撮影は原則不可。

< 閲覧 >

- ・開館日 水・木・金 (祝祭日は除く)
- ・開館時間 午前9時30分～午後4時30分
(昼休みは資料の出納はできない)
所定の閲覧表に所定事項を記入。身分証明書を提示。
* 館外貸出、飲食不可。撮影は原則禁止。
展示や閲覧の利用についてはHP: <http://www.tosho-bunko.jp/> で確認してください。

4 その他

教科書に特化した専門図書館である東書文庫。資料が一番の魅力なのは確かだが、その建物も建設時のものがそのまま残っているのも魅力であり、建築に興味がある方の来館も多いと聞く。庭の木立も風情があり、当時にタイムスリップしたかのようにも感じられた。また、庭には石川社長が伊勢神宮から分祀した「東書神社」も祀られている。

王子というと紙にゆかりのある施設(「紙の博物館」や「お札と切手の博物館」等)も多いが、ぜひこの東書文庫にも足を伸ばしてほしいと思う。

(かんばら かずこ)

図書館をテーマにつなごう！

—「図書館と県民のつどい埼玉」を紹介しませう—

大橋 はるか

埼玉県図書館協会と埼玉県教育委員会が主催する「図書館と県民のつどい埼玉」（以下「つどい」）は、著名な作家を迎えての記念講演、ビブリオバトル（知の書評合戦）やこども読書活動交流集会、展示など盛りだくさんの内容で、参加した方が図書館や読書に親しんでいただけるイベントです。他県でも「図書館まつり」や「図書館講演会」などが開催されていますが、この「つどい」の一番の特徴は、埼玉県図書館協会に加盟する公共図書館、大学図書館、高校図書館、学校図書館（小中学校）、専門図書館の職員が館種を超えて集まり、こどもの読書にかかわるボランティアの皆さんなど多くの方々の協働で、図書館をテーマとしたひとつのイベントを創りあげていることです。このようなイベントは全国でも珍しいのではないのでしょうか。

「つどい」が始まったのは2007年。第1回の記録を見ると「「活字・文化の日（10月27日）」制定を記念し（中略）実施する」とあります。以前から埼玉県図書館協会では、「本を読む県民のつどい」や作家の方にお話しいただく「図書館講演会」などを開催してきました。「こども読書活動集会」は、2003年に「おはなしボランティアのつどい」として開催したのを始まりに、おはなしボランティア団体、文庫、学校図書館、公共図書館関係者を対象に交流とスキルアップを目的に毎年開かれてきました。このような活動を一緒に行い、さらなる発展を目指すため「埼玉県図書館大会（仮称）」が提案され、「図書館と県民のつどい埼玉」という名称で、第1回が2007年10月27日にさいたま市民会館うらわを会場に開催されたのです。当日は生憎の台風でしたが、そんな中でも参加者は延べ700人近くを数え盛況のうちに開催できました。その後、内容を変えながら毎年開催され、現在に至っています。イベントの認知度も開催回を重ね

るごとに広がり、昨年度は延べ約2,000名の参加がありました。

「つどい」の目玉となる記念講演には、活躍中の著名な作家を毎回講師としてお迎えしています。最

近では、あさのあつこ氏と中高生とのトークセッション（2011年）、辻村深月氏と高校生読者との対談（2014年）など一般的な「講演」のイメージにとらわれない形式も見られるようになってきました。

2014年から始まったビブリオバトル（知の書評合戦）では、6名の中高生による「チャンプ本」獲得を目指しての熱い戦いをご覧ください。「こども読書活動集会」では3つの分科会でこどもの読書に関する講座を受けることができ、「こどもひろば」ではおはなし会やおすすめの本の展示をしており、お子様と一緒に楽しめます。

県図書館協会に加盟する公共図書館部会、高校図書館部会、大学図書館部会による展示も毎年趣向を凝らし、各図書館の活動をより深く、分かりやすく知っていただく内容となっています。

そして、今年も12月16日（日）に北本市文化センター（埼玉県）で12回目となる「図書館と県民のつどい埼玉2018」を開催します。

記念講演には『桐島、部活やめるってよ』『何者』『チア男子！！』等の著作で人気の朝井リョウ氏（作家）をお迎えします。ラジオ番組にもレギュラー出演している朝井リョウさんが「朝井リョウの図書館ラジオ～質問にひたすら答えます～」と題し、事前に寄せられた質問にラジオ番組のノリで答えてください。

会場で図書館を愛する図書館員、ボランティアたちがお待ちしています。ぜひお越しください。詳しくは埼玉県立図書館のホームページ（<https://www.lib.pref.saitama.jp/>）をご覧ください。

（おおはし はるか:埼玉県立熊谷図書館）



ありがとうのキモチ

石津亜貴子

市の図書館に勤めだしてほぼ1年になる。最初は業務を覚え、慣れることに精一杯だったのだが、しばらくして少し周りが見えてくると自分が他の先輩方と比べて格段に貸し出し返却作業がのろいことに気づいた。もちろん、何年、いや何十年？の経験ある方々に比べればしょうがないのだが…焦るきもちを抱えているとき、こう言われた。

「石津さんって、丁寧だよね」

軽く批判されたのかもしれないがそこは前向きに捉えて。自分は本の向きを相手に向けるようにして置き、最後にきちんと整えて渡していた。大きい本が下に、小さい本は上に。最後にはぺこりとカウンターの上で手を合わせていた。先輩方は、流れるような手さばきで本の向きやサイズを整えていくけれど、ぺこりとはしていない。かといって、ぞんざいな対応をしているわけではなく、返却日をご案内しながら「ありがとう」の気持ちを、言葉のトーンで伝えている。ただ時折「お役所仕事」という文字が浮かぶ場面がある。

その昔、百貨店で働いていた。いわゆる自社製品の販売のために送りこまれる派遣さんで、関東の名だたるデパートの店頭立った経験がある。朝礼も、細かいしきたりも、バックヤードの汚さも、それぞれ特色があって面白いのだが、どこの研修でもお辞儀の練習があった。まずは15度、そして30度、最後に45度。その角度に曲げたまま静止し、「45度はもっと深く！」と修正されたりもした。そして売り場では、どの角度のものも本当によくお辞儀をする機会があった。今どきお辞儀の練習なんて…と内心思っていたけれど、やはり必要な練習だったのだ。

百貨店やホテルなどは、手厚いサービスも価格の内だし、お客様もそういう対応を求めてお見えになる。VIPと呼ばれるお客様は、私などが一回で使う金額と2桁は違う。毎月予算・販売目標があり、追われる身としては、やっぱりお客様は神様で、自然とお辞儀も深くなる。

改めて今の仕事場を見てみると、会釈はしている

が、お辞儀をしている姿はほとんど見られない。考えてみると、市役所などでも同様だ。カウンター越しだから？ いやいや、空港にある日系のエアラインのカウンターでは、ご丁寧におへその上に手をやってお辞儀をするところもある。そこまでするとやり過ぎな感もあるが、お辞儀をしているわずか数秒、そのお客様だけに「ありがとう」の気持ちを込める、というのは相手に確実に伝わる美しい所作だと思う。

図書館の利用者から対応が悪い、とクレームも入らないのだから、求められていないのかもしれないし、それでいいのかもしれない。でも処理冊数が毎月ランキングされるのはなぜ？ 表に出さずとも気分を害していたら、他の図書館を利用されるかも？ 利用者数と割当て予算はリンクするのでは？ と常々感じている。

図書館に就職が決まったとき、友人から「図書館って、楽そうだよねえ。ピッピッってコンビニみたいにやればいいんだから。座れるし。」と言われた。軽い衝撃（コンビニとは異なるサービス形態だと思っていたので）。確かに貸し出し返却の処理は、教われれば誰でもできる。レファレンス以外の図書館員の仕事は、100年後にはAIに取って代わられるかもしれない（行政から予算がつけば、の話だけれど）。

毎回深々とお辞儀を！と言いたいのではなく、所作や言葉に気持ちを込める大事さを。図書館には本を借りに来るだけではなくて、私達とおしゃべりするのが楽しみに来てくださる方がいる。「おすすめはなんですか？」と何度も聞きに来て、かまってほしくてしょうがない子も来る。様々な気持ちを携えて本を借りに来る方々に、どれだけいたわりやありがとうのキモチをのせて本を貸し出せるか。本を介してどれだけ利用者となつながらか。今後の私達の存在意義はそこにあり、力量が試されるように感じている。

(いしづ あきこ:市立図書館勤務)

鳥の目 70

—20世紀回想～ハヤブサ追跡物語—

為貞 貞人

ハヤブサの渡り

鳥の渡りは昔から多くの人の夢と想像をかきたててきました。以前、私はロシアからアフリカまでの眼下の世界を見た若いクロズルの渡りの物語、『鶴は南へ飛ぶ』（N・カラージン作）を紹介したことがあります。この鳥を擬人化した19世紀の物語とは対照的に、人間がハヤブサの跡を追い大空から鳥の目になって自然と人間社会を眺望した物語、アラン・テナント著『On the Wing ハヤブサに託した地図のない旅』（鳥見真生訳／柏艚舎／2005年）は、渡り鳥をめぐる忘れていた20世紀のよき感動をよみがえらせます。

南極大陸を除く全世界に分布しているハヤブサ科は58種といわれ、そのうちのハヤブサ属は、おおまかに、昆虫を餌とするチゴハヤブサの系統、小鳥を狩るコチョウゲンボウやチョウゲンボウの系統、日本にいる亜種ハヤブサなどの系統、そして大型のシロハヤブサやラナーハヤブサの系統の4つに分けられます。

日本で繁殖する亜種ハヤブサは留鳥で渡りはしませんが、同じ系統の北アメリカやグリーンランドなど北極圏で繁殖し、南アメリカで越冬するツンドラハヤブサなどほとんどのハヤブサは渡りをします。ハヤブサは威厳ある優美な姿と飛翔力によって昔から最高の賛辞を受けてきましたが、その渡りも雄大で、ときに長距離におよび、北極地方で繁殖するハヤブサは毎年秋と春に多くが単独で数千キロもの渡りを行います。またハヤブサの飛翔は驚異的で、瞬間時速350～400kmを出します。

注目されるのはハヤブサの視力です。オオタカとの交流の日々を回想した著書『オはオオタカのオ』（山川純子訳／白水社／2016年）で知られるヘレン・マクドナルドは、『ハヤブサ その歴史・文化・生態』（宇丹貴代実訳／白水社／2017年）の中で「ハヤブサであるということは、どういうことか」と問い、「他人の生活世界を理解しようと

いう主張は、哲学的に疑わしい。動物が相手の場合、ばかげてさえいる」と言いながらも、「まぎれもなく興味をそそられる試みだ」と述べています。ハヤブサの知覚世界は、感覚系と神経系の動きが高速のため、反応が極めて速く、彼らの世界は人間のその約10倍の速さで動くので、目の前をすばやく飛び過ぎるトンボなどもはるかに遅く見え、全速力で足を伸ばして空中の鳥やトンボをつかむことができ、また一瞬の間に私たちより多くのものを見ることができるといわれます。このような感覚世界に生まれた若いハヤブサは、単独の長い渡りにあたり、受け継がれた空の道をどうして選び、どこへ、なにを求めて飛ぶのでしょうか。

ハヤブサに魅せられる

ワシントン・ポスト紙の2004年のベスト100冊に選ばれた『On the Wing』は、電波発信器を取りつけたハヤブサからの信号を受信機でひろい、セーナ機で追った自然ジャーナリスト、アラン・テナントのノンフィクションです。1993年にアメリカで2羽のハヤブサに小型発信機を装着し、通信衛星による追跡が始まる少し前です。

1980年代半ば、米国テキサス州のメキシコ湾の砂州島パレドでハヤブサ調査チームの一員としてハヤブサを捕獲し足環をつける作業をしていた自然ジャーナリストのアランは、同チームで調査飛行機の操縦を行っていた第二次世界大戦の戦闘機パイロットのジョージ・ヴォースに、個人的なハヤブサの渡りの飛行追跡の話を持ちかけました。

当時、テキサス大学M. D. アンダーソンがんセンターが、軍と協力してDDTなど殺虫剤の化学物質の生物凝縮調査を行っていました。ハヤブサに電波発信機を装着して行う追跡調査はハヤブサの血液検査から汚染地域などの情報を得るためです。アランは中年のボランティアで、このプロジェクト・リーダーの一人テキサス大学バストロップ科学センターのケントン・リドルの友人です。相棒となるジョー

ジは調査にチャーターされた年代物のセスナ機をもつ60歳代のベテラン操縦士でした。

アメリカ大陸にいるアメリカハヤブサは定住性が強く都市部の摩天楼にも巣をかまえますが、ツンドラハヤブサは営巣地が各大陸の北極圏ぞいに広がっており、毎年秋に極地方からアメリカ大陸を縦断、メキシコ湾岸の干潟を中継地として狩りをし、さらに南下してアルゼンチンまで飛んでいくものまでいます。そして、毎年4月ぐっと数を減らしたツンドラハヤブサが南のどこからか再びパドレ島に現れますが、これらがカナダやアラスカから飛来した同じ個体なのか、どこで越冬したのか、なぜ数を減らして戻ってくるのかは不明でした。

春、砂浜の夜明け前、しんとした空から、かすかに鳥の声が降ってきます。メキシコ湾を渡ってきたスズメ目の歌鳥たちが、ついに陸地を目にした喜びの声です。この北へ向かう途中の小鳥たちがパドレ島に到着するのをハヤブサは腹をすかして待っています。アレンはこの空腹のハヤブサをハトをおとりに釣り糸のしかけで捕獲します。

4月の朝、捕らわれたハヤブサは、「この世のも

のとは思われない大きな目で」急に飛べなくなったことに憤慨し、「怒れる小さな天使のように」アレンをにらみつけます。フードをかぶせて足環と発信器を取り付けます。黒っぽい頭や首筋、濃い腹の縞模様、白っぽい頬に青灰色の背面、「一日中でも見つめたかった」というほど美しいハヤブサを風上に向かって放しました。驚いたことにこのハヤブサは、しばらくして舞い戻り、「けがらわしいものに触れられた」ともいいかげんに、アレンをにらみつけながら黒いくちばしでデリケートな羽の一枚一枚を点検して消えました。

アレンのハヤブサへの思いはいよいよ深まります。4800キロ離れた生まれ故郷の極北の断崖をめざして、再びハヤブサを飛び立たせるそのパワーと、脳のシナプスに刻み込まれた祖先から受け継がれてきた渡りの記憶だけを頼りに渡っていく標識のない旅路について。

アレンを空へ駆り立てたものは、ハヤブサのその生地への「太古からの熱い憧れのようなもの」への共感であり、あの美しいハヤブサと一体になりたいというやみがたい情念でした。

(ためさだ さだと:さいたま市図書館友の会)